

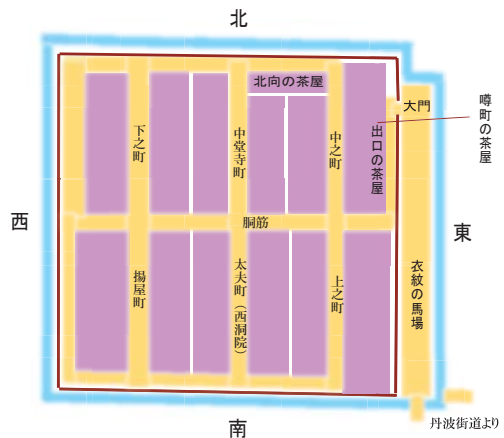
第18回 島原界隈を歩く

■ 六条三筋町から島原西新屋敷へ

京都の公許の遊廓は、豊臣秀吉の政策により、一五九八年（天正十七年）に二条万里小路（今の柳馬場通）に「二条柳町」として開設されたのが始まりです。通称「新屋敷」と呼ばれました。徳川時代になって二条城が造営されたため、一六〇二年（慶長七年）に二条柳町は移転させられ、六条柳町となりました（この年は、東西の本願寺が分派した年でもあります）。通称は、六条三筋町。本シリーズ第6回「消えた六条三筋町」で詳しく説明した通りです。

そのあと、一六四一年（寛永十八年）に移転が京都所司代から命令されました。命令がでた直接の経緯はさることながら、多分、「六条柳町」が東本願寺の北で、周囲の市街化が進んだためだと推測されます。この移転では、六条三筋町の西「西洞院」にあった「太夫町」と所在地不詳の「中堂寺」にあった茶屋も集めて、京都の西南のはずれ朱雀野に遊廓を設営しました。正式名は西新屋敷柳町。通称島原。『色道大鏡』（一六八〇年頃）の挿絵にしましたが、その概略を示します。大門は、東側の堀の北隅にあります。

『京都市の地名』には、移転直前の寛永十七年（一六四〇年）



島原遊廓の概略（一六八〇年頃）

七月十二日付の証文（替地請取証文）が引用されていて、発足当時の島原の概要がわかります。おもしろいので、引用しよう。亀甲括弧内には、メートルへの換算と坪数の検算を心覚えのために書いておきました。振りがなをつけましたが、我流なので間違っているかもしれません。

請取申替り屋敷之事

- 一、東西 九拾九間〔178m〕
- 一、北南 百貳拾三間〔221m〕

此坪壹万貳千百七拾七坪〔99 × 123 = 12177〕

一、長四百五拾間 $(2 \times (99 + 123 + 3)) = 450$ (堀外周)
 惣廻り堀

はゞ一間半

此坪六百七拾五坪 $(2 \times (99 + 3 + 123)) \times 1.5 = 675$

一、長百五拾三間 $(275m)$

丹波海道より東の入口迄

はゞ三間

此坪四百五拾九坪 $(153 \times 3 = 459)$

一、長九拾九間 $(178m)$

東のそとかはの堀

はゞ壹間半

此坪百四拾八坪半 $(99 \times 1.5 = 148.5)$

惣坪数合壹万三千四百五拾九坪

右之間数六尺五寸棹にて少しも相違無御座請取申候、地割の儀は中間といたし古しへの屋敷之ごとく割前仕申分、無之様に可仕候、為其如此、御座候

寛文十七年

柳町上ノ町 喜左衛門

辰七月十二日

同 中ノ町 源右衛門

同 下ノ町 円雪

太夫町 三四郎

中堂寺 次郎兵衛

『京都市の地名』、平凡社、一九七九、九四二ページ

この証文の記述では、東側の堀が二重になっていますが、『色道大鏡』の挿絵では、すでにありません。多分埋め立てられたのでしょう。また五名の連署になっていますが、揚屋町の代表の署名がありません。これは、揚屋町が他の五町の揚屋だけを集めて新たに作ったためだと思われれます。

■ 西新屋敷を島原と呼ぶ由来

この遊廓をなぜ島原と呼び始めたかには、諸説あります。宮川政運『俗事百工起源』(一八六五年刊行)では、「島原と云える始め」と題して、

「島原と云える始め」

ある書に云う書名、寛永十八年、今の朱雀野に移され、一つの門のみにして他の道なし。先に事ありし肥前の島原の城に似たりとて、俗に島原と呼びけるより名とはなれりと云う。(後略)

宮川政運『俗事百工起源』巻之中、一八六五

『塵塚談・俗事百工起源』神郡周校注解説、

現代思潮社、一九八一

『俗事百工起源』が刊行された一八六五年には、「書名失念」とした「ある書」の説が広くおこなわれるようになっていましたが、この「ある書」とはなんでしょうか？ 著者宮川政運が実際に参照したかどうかはともかく、多分、『浮世物語』(一六六五年頃)か『色道大鏡』(一六八〇年頃)のことでしょう。

『浮世物語』には、次のように記載されています。
「傾城の事」

京の傾城町は、六条の三筋町、西の洞院、中堂寺とてありしを、去んぬる比よりひとつに合せて、七条西朱雀丹波街道の北に嶋原とて、肥前の天草一揆のとりこもりし、嶋原の城のごとく、三方はふさがりて一方に口ある故に、かやうになづけ侍べり。

浅井了意『浮世物語』巻第一の五、一六六五頃
(谷協理史、岡雅彦、井上和人校注訳『仮名草子集』)

新編日本古典全集64、小学館、一九九〇

『色道大鏡』にも次のように述べられており、すでに一六八〇年頃には通説になっていたことがわかります。ただし、『色道大鏡』では、一応この説を紹介していますが、別の説を述べています。

「第一 雒陽傾城町来由」

大猷院殿の御代、寛永十八年辛巳年、又六條より今の新屋敷に遷さる。此時より、此所を島原ともいふ。或曰、肥前國嶋原陣落去の砌として、郭の構へ一郭一門にして、四方按揚の堀なるが有馬の城に似たりとて、かくいひしときけど、是はおぼろけの譬へとや申べからん。

藤本箕山『色道大鏡』巻第十二・日本遊廓總目
新版色道大鏡刊行会編、八木書店、二〇〇六

このように通説を否としたあと、「鳥羽天皇の在世のときにいたという嶋千歳・和哥前が遊女の最初であるということから、この嶋をとり、原は広い心の意味で、嶋原と名づけた」という説と、「肥後國に風流嶋というのがあり、伊勢物語にも遊嶋とあるので、戯れる境地ということから嶋原と名づけた」という説を立てています。

同じ島原の乱に由来するという説でも、すこし違ったものもあります。島原の乱（一六三七年〔寛永十四年〕〜一六三八年〔寛永十五年〕）の余燼くすぶるなかで、六条三筋町からあわただしく移転（一六四一年〔寛永十八年〕）したことから、移転騒動が島原の乱の騒動を思い出させるということで、島原と呼ぶようになったという説です。

もうすこし、異なった説もあります。『色道大鏡』には、「敵」という廓用語に、「客より傾城をさしていふ、傾城より客をさしていふ。とかく、相手のきはまりたるをさしていふ詞なり。」という説明が付いています。廓の中にいる傾城を、島原城にたてこもった敵に見立てて、遊廓に通うことを「いざ島原へ攻め込まん」と洒落たのがもとで、島原と呼ぶようになったのではないかと、このものもつともらしい。

ところで、六条三筋町から朱雀野への移転を命じた所司代は板倉重宗（在職一六一九〜一六五四）。島原の乱で討死した板倉重昌はその弟。そこで、島原と呼ぶようになったことの珍説をもう一つ。「板倉重昌に攻められる側の島原城」対「板倉重宗に移転を無理強いされる（島原）遊廓」という図式。

遊 女 「所司代の板倉はんの御沙汰で、この廓に閉じ込められて、六条三筋町のころがなつかしおす。」

客 「先に終わった島原の騷擾とおんなじや。さしずめ、おまえは、籠城したキリシタンみたいなんやな。」

遊 女 「ほんとうに。四方は塀で出口は一つ。討死にするより、ここを逃れる道はない。」

客 「そうそう。島原の騷擾で、板倉はんの弟さんが亡くならはったそうや。キリシタンを籠城するまでに追い込まはったさかい、罰があたつたんやろな。」

そして、「遊廓を急に移すような無理強いをこれ以上すると、島原で討死した弟さんのようになりますよ。」という当てこすり。つまり、所司代に対するあてこすりだ。「島原」と呼ぶようになったというものです。「それかあらぬか、幕末に至るまで、島原遊廓の移動はおこなわれなかつたのです」という落ちも付け加えておきましょう。こじつけに近い珍説ですが、われながら、もつともらしい説ができました。

■ 島原へのアクセス今昔

本シリーズ第17回で、丹波口大宮から丹波街道を通過して、島原にいたる古い道筋について説明しました。島原あたりは、明治時代に至っても田畑が広がっていた土地で、比較的新しく（京都の時代尺度では）市街になつたので、この道筋が現在のどこにあ

たるのかは、言葉で説明しただけではわかりにくい。そこで、略図を描いて説明することにいたしました。

本シリーズ第17回でのべた『色道大鏡』の「坤郭野徑之圖」（藤本箕山『色道大鏡』巻第十二・遊廓図上。翻刻版、新版色道大鏡刊行会編、八木書店、二〇〇六、三五〇ページ）は、一六八〇年頃の様子を示したのですが、あまりにデフォルメしすぎています。そこで、ほかの資料と引き比べながら、一六八〇年頃から島原の最盛期の様子を、略図といい条、もうすこしきちんと作図します。

参考にした図は、『京都指掌圖文久改正』（一八六二年）です。この図は、日文研のホームページ（<http://tois.nichibun.ac.jp/chizu/images/002813426.html>）にあります。しかし、これでも、島原付近は概略しかわかりませんので、同じホームページ（002462430.html）の『最新實測京都新地圖』二万分の一（一九〇八）と付き合せて補正します。

『色道大鏡』の図に載っている地名のうち、目印になりそうなのは、二人塚、夷杜、衣紋馬場、壬生川。一方、『京都指掌圖文久改正』（一八六二年）に載っている目印になる場所は、稻荷神社（「いなり」）、二人塚（「二人ツカ」）、諏訪神社（「スハキン」、後半の「キン」は？）です。稻荷神社は現在の「豆之子稻荷神社」に相当すると推定されます。諏訪神社は、平安高校の西に現在も残っています。

このようにして作成した、一六八〇年～一七五〇年頃の様子を、略図として載せました。実のところ、地図の年代を一時期に特定することはできないので、有体は、幕末の頃の略図（『京都

島原遊廓へのアクセス（一八六〇年頃の地図に一六八〇年頃のアクセスを重ねたもの）



指掌圖文久改正』（一八六二年）に一六八〇年〜一七五〇年頃の様子を書き入れたものです。この略図で、丹波街道の概略がわかりますので、本シリーズ第17回の「丹波街道は島原への道」をもう一度読み直してください。文芸作品に出てくる島原は、このころの様子を踏まえたと推測されるものがありますので、より深い理解のためには、この略図がきつと役に立つでしょう。

初期の島原へのアクセスは、大宮通より丹波街道町（丹波口通大宮）を抜けて、丹波街道を辿り、二人塚の分かれ道で、島原に向かう道筋です（『色道大鏡』で「古道」と記された道筋）。『色道大鏡』が出版された一六八〇年頃には、花屋町通に相当する道が開かれていますので、丹波街道から花屋町通を辿るようになっていたと考えられます。島原の全盛期は、元禄期（一六八八〜一七〇四）。さらに時代は下って、享保十七年（一七三二年）に西門が作られ、千本通からも入廊できるようになりました。さらに明和三年（一七六六年）に、島原大門が、東堀の北部分から中央部分（胴筋あるいは道筋と呼ばれる中央東西路の東端）に移動しました。この時期には、大宮通（今の島原口）から花屋町通を進むことができるようになっていたと推定されます。

さて、現在のアクセス。阪急電鉄の大宮駅から、市バスの二〇七番（その他大宮通を南下する路線）に乗り、島原口のバス停で降りて、花屋町通（島原商店街）を西に進む道筋。もう一つは、本シリーズ第17回のように、JR丹波口で降り、徒歩で千本通か坊城通（五条坊城の西南かどにある京都市中堂寺坊城郵便局が目印）を南下する道筋。千本通は中央卸売市場に出入りする車が多いので、坊城通のほうがおすすすめ。

■ 二人塚と二人司町

なお、『色道大鏡』の「坤郭野徑之圖」(一六八〇年頃)と『京都指掌圖文久改正』(一八六二年)とで、共通する目印は、二人塚ですが、現在はありません。亡くなった島原の太夫二人を埋めた塚であるという言い伝えがあったようですが、多分後世の付会でしょう。まったくの推測ですが、道祖神の塚かもしれない。丹波街道から島原への道の分岐点になりますから、ここに道祖神があったというのはありそうなことです。双体道祖神は、男女二神が睦みあう姿が彫られていますから、いかにも島原への分かれ道にふさわしい。ただし、この妄想には、まったく根拠はありません。

ところで、「二人塚」は現在の町名「二人司町」の由来となった地名です。京都市に編入する前は、もともと「葛野郡大内村大字八条小字二人塚」と呼ばれていた地域です。八条村と周辺の村は、町家が建つとすこしずつ京都市に編入されてゆき、残った部分と他の村を合わせて、明治中期には、大内村となっていました(明治二二年(一八八九年)の市制・町村制施行)。もとの村(八条村、東塩小路村、西九条村、朱雀村、中堂寺村)は、大字として地名に残っていました。大内村の全域が京都市に編入したのは、大正七年(一九一八年)のことです。大内の地名は、大内学区として、現在に残っています。学区の中心であった大内小学校は、安寧小学校と統合されて、梅小路小学校と名前を変えています。現在の町名に「夷馬場町」がありますが、これは、夷杜と衣紋馬場が一緒になったものではないかと推測されます。現在の

地図で二人司町、夷馬場町、諏訪開町の境界付近を仔細にみると、正面通と壬生川通の交差点と微妙にずれていることがわかります。とくに二人司町と夷馬場町の境界は、正面通のすぐ南の東西の路地になっています。この路地が、丹波街道から島原に至る分かれ道(「朱雀の細道」)の名残ではないか。そして、二人司町、夷馬場町、諏訪開町の接点(正面通と壬生川通の交差点より東南十メートルくらいの地点)が、二人塚のあった三叉路ではないかと推定できます。

この結論は、この回の冒頭に引用した「替地請取証文」の記載からも傍証がえられます。二人塚(現在の壬生川正面の交差点付近)で丹波街道から分かれて、島原に至る畦道約九〇メートルが「朱雀の細道」。島原の東塀にそった「衣紋の馬場」約一八〇メートル(大門が東北端より約四十メートル南にあったと仮定)を歩くと大門に着きます。あわせて、約二七〇メートル。この回の冒頭に引用した「替地請取証文」にある「丹波海道より東の入口まで長さ百五拾三間(37.5m)」にほぼ合致することがわかります。したがって、「朱雀の細道」と「衣紋の馬場」が島原開設時に新たに開かれた道ということになります。

■ 島原へのアクセス―浮世草子・仮名草子では

西鶴の浮世草子『好色一代男』(天和二年(一六八二年)刊行)にも、丹波口から島原への道中の様子がでてきます。主人公の世之助が、島原の太夫初音を揚げる場面。結局、大尽客の正月買

のあおりで、二六、七日までは会うことはかなわずに過ぎてしまいます。

「詠は初姿」

姿の人物、おろせがいそげば、丹波口の初朝、小六が罷出て、「御慶」と申納、朱雀の野辺近く、はや鷺の初音といふ太夫のけふの礼を見いでとはと、出口の茶屋に、腰懸ながら、(後略)

井原西鶴『好色一代男』巻六、一六八二

(前田金五郎『好色一代男全注釈』下巻角川書店、一九八二)「姿の人物」とは、遊里通いの駕籠をいいます。「おろせ」は駕籠かきのこと。丹波口(丹波街道町)の茶屋街で駕籠を乗り捨てて徒歩で島原までゆくことになっていたようです。仮名草子『たきつけ草』(延宝五年〔一六七七年〕刊行)には、駕籠を丹波口(丹波街道町)の茶屋で降り、茶屋で身づくろいをしてから、茶屋の焼印入りの編笠を被つて、島原へ行く様子が描かれています。

(前略) 先づ、宿の首尾大方につくろひ、小揚が方までたより来て、「日は何刻にかあらん。駕籠いそぎ物せよ」といひたるに、「はつ」といひて起つよりも早く、もて寄せたるにうち乗り、(中略)羊に歩み程なくて、丹波口なる茶屋のがりかき入れしに、鬢かきなどで、帯しなをしながら、心うちつきたる風情、世になくうれし。

さて、忍び編笠の深くもきなし、大路を出離れ、廓の屋作り見つけたるうれしき、いへばさらなり。細道の畔

をつたひ、稲葉の露にそぼちつつ、衣紋の馬場歩み入る折から、噂町の茶屋の知れるより、早くも見とがめて、にくからぬ様体して、後につきて来たるもおかし。胴筋をねりもて行く折から、ときめける女郎など、(後略)

作者不詳『たきつけ草』、一六七七(谷脇理史、岡雅彦、井上和人校注訳『仮名草子集』

新編日本古典全集64、小学館、一九九六)

「小揚」とは、遊廓へ通う駕籠かきのこと。「噂町の茶屋」は、島原の大門から入ったすぐに並んでいた、出口の茶屋のこと。「忍び編笠」は、丹波口の茶屋で支給される焼印入りの編笠のこと。「胴筋」は、島原遊廓の中央東西路。

■ 島原歌舞練場跡と投節

島原についてに前置きはこれくらいにして、現在の島原界隈を歩いみることにしましょう。本シリーズ第17回では、JR丹波口駅で降りて、坊城通の二筋東の通りをあるきましたが、今回は、坊城通を南下することにします。

中央卸売市場の東壁が途切れたあたりに、島原歌舞練場記念碑があります。この記念碑によると、島原歌舞練場の発足は明治六年(一八七二年)。昭和二年(一九二七年)にこの地に移り、昭和二年(一九四七年)まで歌舞練場として使用。その後は、島原貸席お茶屋業組合の事務所として使用されたが、同組合の解散にともなって、平成八年(一九九六年)に解体。跡地は、京都市

町名看板の所在（島原界限）



島原老人デイサービスセンターとなっています。
 歌舞練場とは、いわゆる「花街」のシンボルです。芸事を表看板にする芸妓を組織的に養成、成果を発表するための場が、歌舞練場。そのような組織的な養成システムをもっている場所が花街と呼ばれます。それは、島原歌舞練場の歴史がしめすように、明治時代以降のこと。江戸時代は、芸妓も娼妓も一くくりに遊女と呼ばれていて、その居所は遊廓、廓と一般に呼ばれていました。歌舞練場が閉鎖されたのは、島原が花街として維持できなく



島原歌舞練場記念碑



なったということ。暗示するように記念碑に添えられた歌は、吉井勇「二八八六〜一九六〇」のもの。

勇

宝暦の昔の夢は見は見つれ

夜半の投節聴くよしもなし

この歌に出てくる「投節」とはなんぞや？ 上に引用した『好色一代男』「詠は初姿」のすぐうしろに、投節を歌う遊女がでてきます。やつと初音に会えた主人公の世之助は、初音に先手をうたれてどぎまぎして、動揺を隠すために、大盤振る舞い。

「詠は初姿」(承前)

(前略) 伽羅も惜まず焼すて、中二階の古きに気をつけ、亭主をよび出し「是では置れじ」と、普請をうけあひ、口鼻によぎ物をとらせ、投ぶしうたふ女に、したんの接棹をはずみ、太夫手前の全盛。(後略)

井原西鶴『好色一代男』巻六
(前田金五郎『好色一代男全注釈』下巻角川書店、一九八二)

広辞苑によれば、投節とは、「江戸前期の流行歌。京都島原の遊女河内が歌い始めたといひ、歌の末を「やん」と投げて歌つた。のちに長唄や浄瑠璃などの三味線音楽で、廓の情景を表す旋律型として用いられた。」と説明されています。七七七五調。これは、のちの都々逸と同じ。通説では、この「遊女河内」とは、明暦〔二六五五〕一六五八〕の頃、島原下之町の柏屋中村又十郎抱えの遊女であったとのこと。これには、異論があつて、島原下之町の大坂屋杉村太郎兵衛抱えの遊女「河内」(『色道大鏡』巻第十六「遊女系譜」で「諱経子。禿名は勘弥、累子三笠につかふる。寛文十一辛亥三月廿一日出世して天職となる、三笠これを導く。延宝六戊午三月十八日太夫職に任ず。」と説明されている遊女)であるという説(野間光辰)が、この引用の後注(『好色一代男全注釈』下巻の二八〇ページ)に記載されています。ちなみに、寛文十二年は一六七一年、延宝六年は一六七八年です。

『色道大鏡』巻第十六の遊女系譜は、寛文・延宝年間(一六六一〜一六八一)の記事が中心になっているので、『色道大鏡』の

成立を一六八〇年頃とみています。してみると、そのころには大坂屋河内も太夫を張っていますので、すでに投節が流行していたはずで、『色道大鏡』の著者の藤本箕山(一六二八〜一七〇四)も当然知っていたにちがいない。『色道大鏡』では、「小歌」を説明して、次のように記載されていますが、「投節」の語は直接には出てきません。

(前略) 抑、傾城の哥は、らうさい・片撥を最上とす。
次に柳節・信田節、尤是を賞す。但、此二節は、時分に
よりて一きは甘味あるべし。(後略)

藤本箕山『色道大鏡』巻第八・音曲部

新版色道大鏡刊行会編、八木書店、二〇〇六
上述の『たぎつけ草』の続きであるとおもわれる仮名草子『けしずみ』(二六七七年刊行)には、「おもしろき物」という物尽くしのひとつとして、「なぎ節」があげられています。

おもしろき物

躍りはさらなり。いつ聞いてもなぎ節。(中略)すべ
て出口の門をふみ越ゆるといなや、ひとつとして面白か
らぬ事なし。

作者不詳『けしずみ』、一六七七

(谷脇理史、岡雅彦、井上和人校注訳『仮名草子集』
新編日本古典全集64、小学館、一九九九)
これらの書物に出てくる柳節が、投節のことと考えられます。あるいは、柳節というのがあつて(『色道大鏡』や『けしずみ』の

成立時に)、それをもとに大坂屋河内が歌い方を工夫したのが投節であったというのかもしれない(『色道大鏡』や『けしずみ』の成立後に)。

投節の文句は、実際にはどんなものか? 幸いにも、江戸初期の歌謡が集められた『松の葉』(元禄十六年(一七〇三年)刊行)が残っています。その第五卷に、「古今百首投節」と題して、七七五の投節がちょうど百首集められています。

傾城 十四首

程は雲井に隔つるとても、

心變るな何時までも

『松の葉』第五卷、一七〇三年

(『松の葉』藤田徳太郎校註、岩波文庫五二九、一九三二) この投節の文句は、注によれば、伊勢物語によるもの。実際に調べてみると、伊勢物語の十一に「むかし、をとこ、あづまへ行きけるに、友だちどもに、みちよりいひおこせける」という詞書とともに載っています(『伊勢物語』大津有一校注、岩波文庫三〇〇八―一、一九六四)。さらにもとをたどると、橋忠基の歌として『拾遺和歌集』に採られています。

たちばなのたゞもが、人のむすめにしのびて物いひ侍け

るころ、とをき所にまかり侍とてこの女のもとにいひ

つかはしける

わするなよほどは雲るになりぬとも

空行月のめぐりあふまで

拾遺和歌集卷第八・雑上・四七〇

投節が実際にどんな節回しだったのかは、『松の葉』第五卷の末尾に書いてありますが、わたしごとき素人にはよくわかりません。それはさておき、この部分に「古へ大阪屋河内風と言ひて歌ひしは」という件があります。上述の異論の根拠の一つとなっています。

■ 法華寺と輪違屋

島原歌舞練場記念碑のある通り(坊城通の続き)は、島原中之町。島原歌舞練場記念碑の向かい側には、法華寺(島原西新屋敷中之町)。



法華寺(洛陽十二支妙見末)

この寺の境内にある妙見堂は、「未^{ひつて}の方の妙見様」として、洛陽十二支妙見めぐりの一つ。もともとは、東寺の塔頭の法華堂として建てられたと伝えられ、東寺の北、八条櫛笥付近にあったが、東海道新幹線敷設のため現在地に移転しました。洛陽十二支妙見めぐりは江戸中期に、御所が中心となるように策定されたもの。このため、慈雲寺の中^{さる}(第17回参照)と方位が入れ換わってしまいました。

法華寺の南には、輪違屋^{わちがいで}(島原西新屋敷中之町)。元禄元年(一六八八年)に置屋として創業。明治期に置屋と揚屋を兼ねるようになりました。現在の建物は、安政四年(一八五七年)に再建されたもので、京都市指定・登録文化財。五人の太夫と一人の振袖太夫を置いて、島原でただ一軒営業を続けています。したがって、残念ながら観光客として内部を見ることはできず、客としても一見さんおことわり。

■ 島原大門

坊城通(昔の西新屋敷中之町)を花屋町通(昔の胴筋)にでて、東にゆくと島原大門に着きます。いまでは、廓の内外はありませんが、門を出たところで写真を撮りました。島原大門が、東堀の北部分から中央部分(胴筋あるいは道筋と呼ばれる中央東西路の東端)に移動したのは、明和三年(一七六六年)現在の高麗門形式の大門は、慶応三年(一八六七年)の建築。京都市指定・登録文化財。正面右手に「出口の柳」を配し、「さらば垣」で囲って



輪違屋

いるのは、島原全盛を想像するよすがとなります。

島原大門の脇には、記念碑が建っています。そこには大田垣蓮月(一七八一〜一八七五)の歌が添えられています。

島原のでぐちのやなぎをみて

蓮月尼

なつかしきやなぎのまゆの春風に
なびくほかげやさとの夕ぐれ

大門通(昔の衣紋の馬場に相当?)を南へ。正面通へでたところで、西に折れると、今回初の町名看板「島原西新屋敷上之町」①に出会います。通称の島原が大きく、正式名の西新屋敷が小さく書いてあるのもおもしろい。「上之町」は、二条柳町の時代からの由緒ある町名で、現在も町名看板のように通用しています。



島原大門

■ 角 屋

正面通を西へ突き当たると西新屋敷公園。これは、旧丹波口駅の跡地。西新屋敷公園の前を過ぎて、北へ少し。そこには、「角屋もてなしの文化美術館」（西新屋敷揚屋町）があります。かつての揚屋「角屋」の建物を美術館としたもの。建物は唯一の揚屋建築の遺構として重要文化財。一階部分が展示室や見学可能な座敷・庭で、二階部分（青貝の間・緞子の間など）は予約制で公開されています。

灯笼と蹲のある中庭を三方からみた写真をのせます。一つは、



角屋前景



角屋玄関

箱階子脇の出入口から。もう一つは、縁側から。さらに、中戸口北側の上がり口から、玄関の間と縁側越しに、撮影したもの。コンパクトカメラで撮ったのと腕の悪さのため、よくわからないところもあるが、目を凝らしてみてください。中庭は、涼をとるためと、狭い空間をできるだけ広く見せるための工夫です。

二階は、揚屋の由来となった「客を揚げる」ための座敷が並ん



島原西新屋敷 上之町 ①

角屋（座敷より中庭）



（中戸口より中庭の蹲）



でいます。一番豪華なのは青貝の間。壁や建具など、至る所に青貝の螺鈿をちりばめた座敷。額まで、篆書で書いた「日新又日新」を青貝で覆ったもの。凝った意匠の障子を開けると、外は露天（ベランダ）になっていて、茶室や庭を眺められるようになっています。その他、緞子の間、翠簾の間、扇の間、草花の間、馬の間、桧垣の間など、いずれも贅を尽くした作りです。

一階部分には、主庭に面して大座敷（松の間）があります。ここから、見事な臥竜松をみる事ができます。この松は、『都林泉名勝図会』巻之五の「島原角屋雪興」の図にも描かれています。残念ながら、この時代の松は枯れてしまい、現在のはその後継。

角屋（大座敷より臥竜松）



（臥竜松）

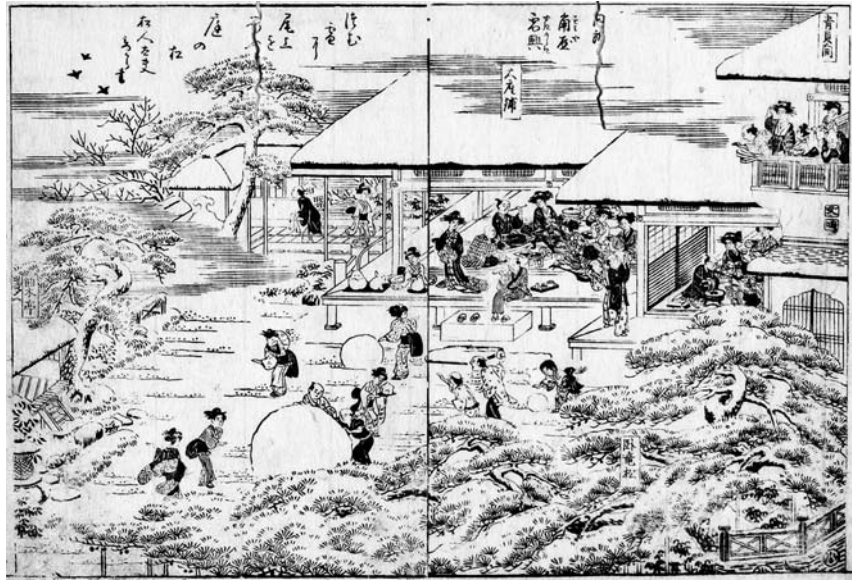


図中の「大座敷」、「青貝間」、「臥竜松」など指示からうかがえる角屋のレイアウトは現在のものとはおなじ。青貝の間の露天（ベランダ）から乗り出すように見物している遊客や太夫なども臨場感にあふれています。

この図の贅には次のように記されています。作者松人太夫の詳細はわかりません。

つむ雪に尾上を思ふ庭の松 松人太夫 みづから書
 「角屋もてなしの文化美術館」の展示品の中には、与謝蕪村の「紅白梅図屏風」（重要文化財）など、与謝蕪村との交流を示す展示があります。几童宛の蕪村書簡（七月廿七日付、後述）の展示もしてあります。

蕪村の『夜半楽』（安永六年〔二七七七年〕刊行）の中に、「春興」と題する句集があり、蕪村の夜半亭社中の四十三人の発句が



『都林泉名勝図会』巻之五 島原角屋雪興の図。
 (国際日本文化センター「平安京都名所図会データベース」より引用)

並んでいます。門人道立の句に始まり、几董の句で終わっています。

「春興」

うぐひすにうかれ鳥のうき世哉 道立

(中略)

神風の春かぜさそふ夜明かな 吞獅

蝶々や衛士の箒にとまりけり 吞周

凧引や夕がすみたつ処々 声声

うぐひすや茶臼の傍にしゆる箒 徳野

(中略)

白梅や吹れ馴たる朝嵐 几董

一部だけ引用しましたが、この中に、島原が、天明・安永期に京都俳壇の中心の一つであったことの証拠が残っています。引用の中で、徳野は、島原角屋の主人です。また、吞獅は、島原桔梗屋の主人です。

■ 幕末の島原

角屋の東北のかど近く、堀に沿って「長州藩 久坂玄瑞の密議の角屋」の碑(西新屋敷揚屋町)が建っています。南横面には久坂の略歴が記されており、「角屋は玄瑞が屢々暗殺の難を避け、潜行密議した場所である。」とされています。

久坂玄瑞(一八四〇〜一八六四)は、長州藩士。長州藩の尊皇攘夷派の中心人物。吉田松陰に学び、その妹文を妻としました。文久三年(一八六三年)の八月十八日の政変(いわゆる七卿落)

久坂玄瑞の密議の角屋



で長州藩が朝廷より一掃されたあと、しばらく京都で活動。この前後、島原桔梗屋の芸妓お辰（辰路）を愛人として、島原に潜伏したといわれています。元治元年（一八六四年）に池田屋事件を機に、長州藩が派兵したときの中心人物の一人となりました。これが、禁門の変（蛤御門の変）。結局敗れて、傷を負い、自刃しました。

角屋は、新選組の芹沢鴨暗殺事件にもでてきます。芹沢鴨（一八二七〜一八六三）は、新選組の初代筆頭局長。文久三年（一八六三年）六月、水口藩との和解の宴席を島原角屋でおこなったときに、芹沢は酔った末に角屋の扱いに因縁をつけて大暴れをし、角屋に七日間の営業停止を命じています。どうも、芹沢は酒乱の気があったらしい。このときの刀傷が角屋の柱に残っています。同九月六日に、懸想していたのに肌を許さないと、大阪吉田

屋の芸妓小寅と付き添いのお鹿を断髪させるという拳に出たといえます。

これらの、芹沢鴨の行状もさることながら、新撰組内の芹沢派と近藤派の内部対立が激しくなったことから、芹沢鴨暗殺事件が起きます。永倉新八日記『浪士文久報国記事』によると、九月十八日（原文は九月六日。諸説あり）に、新選組は島原角屋で大宴会をおこなっています。午後六時頃に島原が終了時刻となったあと、芹沢鴨一派は、屯所のあった壬生の八木邸に戻って、そこでも宴会をつづけました。その宴には、芹沢は四条堀川西入菱屋の妾お梅、平山五郎は島原桔梗屋お抱えのお栄、平間重助は島原輪違屋お抱えの糸里を、それぞれ呼んでいました。その宴には、近藤一派の土方歳三も同席しています。宴のあと、それぞれ同衾して眠り込んでしまったところを見届けて、土方は八木邸を去ります。近藤一派の刺客（御倉伊勢武、土方歳三、沖田総司、藤堂平助）が乗り込み、芹沢とお梅、平山が刺殺されます。襲撃時に便所にいつていたお栄、二階に寝ていた平間と糸里は無事。新選組は、長州藩の仕業として、芹沢と平山の葬儀を盛大におこなっています。

■ 鴻臚館、蕪村と島原

角屋の狭くなった北側部分の東扉に、「東鴻臚館址の碑」があります。平安時代初期に、渤海使の接待に使ったところ。朱雀大路を挟んで東西の鴻臚館がありました。東鴻臚館のほうが早く廃止されたようです。



東鴻臚館址の碑

ここで、鴻臚館と渤海使にまつわる話を少し。陽成天皇元慶六年〔八八二年〕の渤海使は、文籍院少監裴頤。文人として有名だったので、迎える日本側も菅原道真を治部大輔とし応接にあたらせました。加賀国に着いたのち、翌七年〔八八三年〕に京都に迎え、鴻臚館で接待。十二年後の宇多天皇寛平六年〔十二月なので旧暦では八九四年。現行暦では、年がかわって八九五年〕にも、おなじ裴頤が渤海使として来朝、参議に昇進していた菅原道真が中心に鴻臚館で接待。この二回の来朝のときにおこなわれた詩文の交歓は、『菅家文草』などに残されています。

醍醐天皇延喜八年〔九〇八年〕に、渤海使として来朝した裴王は、父の裴頤に劣らぬ文人でした。裴王が帰国するときに、別れの宴が張られ、そこで漢詩の交歓がおこなわれました。日本側から出席したのは、大江朝綱〔八六六〜九五七〕、菅原淳茂〔？

〜九二六〕ら。この宴での大江朝綱の詩は名文としてつとに有名で、『和漢朗詠集』から引用して、本シリーズ第5回で紹介しました。

一方、菅原淳茂の詩は、痛切きわまるもので、送られる裴王も、この句を吟じて泣いたと伝えられています。

裴文籍後聞君久。
菅礼部孤見我新。

淳茂

『和漢朗詠集』七三八

川口久雄全訳注、講談社学術文庫、一九八二に書き下し文
大意は、「お父さんの裴文籍院少監のあと、あなたの文名をずつと伺っております。わたしは、治部大輔〔唐風の官名は礼部〕菅原道真の孤児ですが、初めてお会いいたします」。表面的な字面だけではそんなものかと読み飛ばしてしまいがちですが、「孤」という表現が効いています。この宴の五年前に、菅原道真は失脚し大宰府に流されて、そこで客死していることを思いだすと、俄然、意味が違ってみえますね（本シリーズ第4回参照）。菅原淳茂自身も播磨国に流刑になっていますが、裴の接待にあたって、掌客使に任命されています。もしかしたら、この接待のために流刑を解かれたのかもしれませんが。裴も、父の裴頤から、菅原道真のことは聞き及んでいたことでしょう。そのための落涙であったと思われまます。

このような鴻臚館の歴史を踏まえたいうえで、東鴻臚館址の碑に添えられた与謝蕪村の句を読んでみましょう。この句は、几薫

『ほく帖』四（安永四年）に、題「梅」としてでているものです。次の引用は、『蕪村自筆俳句帳』から。

白梅しらうめ や 墨芳すみかほ しき 鴻こう 鷗ろう 館くわん 蕪村

与謝蕪村『蕪村自筆俳句帳』一八八

尾形仿編著、筑摩書房、一九七四

「墨芳しき」が、鴻臚館の歴史を見事に凝縮した表現であることがわかります。筆・硯・紙でなく、墨。視覚だけでなく、墨の香りという嗅覚で表現したところは、常人ではなんとも真似ができませんね。さらにいえば、冒頭の「白梅や」。菅原道真の「東風吹かば」の歌（本シリーズ第4回参照）を踏まえていることで、上述の鴻臚館での交歓が目につかぶ仕掛けになっています。そして、「白梅や」と「墨芳しき」の対比。色だけでなく、香りの対比。「芳しき」と「館」が韻を踏んでいるところも、耳に残る名句になっている要因です。

ついでに『蕪村自筆俳句帳』から、いまは跡かたもないが、平安の昔のよすがになる場所を詠い込んだ句をもう一つ。鶯と羅生門の対比も、羅生門が荒れ果てていることを見事に表現しています。

うぐひすの啼なや 師走しはすの 羅生門らしやうもん 蕪村

与謝蕪村『蕪村自筆俳句帳』九七二

尾形仿編著、筑摩書房、一九七四

残った書簡をみると、蕪村は四角四面の俳諧の宗匠ではなく、結構遊び好きの面がみえてきます。几董宛の蕪村の書簡に、「島原（不夜城）で、紋日の八朔（陰曆八月一日の節句）に、遊女の

お披露目（新造出し）があるので、一緒に見物にゆきませんか」という内容のものがありません。

尚又八朔は、不夜城新造三人内式人つき出し、国色

のよし。長柄傘四十三本の揃へ、ことの外美々しき様

子に候。ことにとふろうも出候故、どふぞ見物いたし

度物と存じ候。金笛子被仰合御出も候はゞ、御しらせ

可被下候。

七月廿七日

蕪村

几董様

しのゝめもしらで躍敷化くらべ

与謝蕪村『蕪村書簡集』岩波文庫30-210-2、一九六

大谷篤蔵、藤田真一校注、岩波書店、一九九二

この書簡をみても、蕪村が島原に関する情報通であったことがわかります。今回の新造は、三人であること、そのうち二人が禿を経ないで、直接に（つき出しとして）店にでる遊女であること、三人とも日本一の美人（国色）であること、四十三人の太夫・天神が道中するので、差しかける長柄傘が揃って美々しいこと、茶屋の門ごとに立てる灯籠が豪華であることなどを言い添えて、ぜひとも一緒にと誘っております。

添えられた句は、つき出しの新造を詠ったものでしょうか。東雲とは、禿の修行のときに必ず習わなければならない長唄のことか。また、「化けくらべ」とは、島原住吉神社の祭礼の際におこなわれたという仮装行列「練りもの」のことか。この当て推量をも

とに、「つき出しの新造は、東雲しののめも知らないで、仮装行列で踊っている。化けたうえで、もつともらしい所作で踊れば、つき出しの新造でも見分けがつかない。」と解釈しました。強引な解釈で、多分間違っているでしょうが、恥を承知で載せておきましょう。もつとも、無理に「つき出しの新造」に結びつけずに、「仮装行列で浮き浮きして、東の空（しののめ）が白んでくるのにも気づかずに、踊りあかしてしまった。」と素直に解釈するのが自然です。

■ 炭太祇と島原

島原といえ、炭太祇たんだいぎ（一七〇九〜一七七二）を落とすわけにはゆかない。四十を過ぎてから上洛し、大徳寺真珠庵で修行したが、その後還俗げんぞくして島原遊廓に不夜庵を結びました。

耕すやむかし右京の土の艶 太 祇
茄子なす壳うろ揚あ屋やが門かどやあきの雨 太 祇

炭太祇『太祇句選』（『近世俳句俳文集』五四三、五四九、

雲英末男、山下一海、丸山一彦、松尾靖秋校注・訳、

新編日本古典文学全集、小学館、二〇〇一）

どちらも、島原遊廓の周囲が田園地帯であったことが色濃くでていて、島原に住んだ太祇ならではの句です。第一句、島原は、平安京の左京にあります。享保十七年（一七三二年）に西門が作られ、千本通に出られるようになっていました。千本通の西

は、平安時代の右京で、当時は見渡すかぎり、田畑が広がっていました。この句では、「土の艶」という表現に、長い歴史を象徴させています。茫々たる空間から、足元に視点が移り、それとともに、時間も現在から平安時代へタイムスリップしています。市井のことを詠んでいるようで、スケールの大きい句ですね。次の句は、茄子と揚屋の対比が眼目。夜の華やかな遊廓の、昼間の生活を詠んでいて、そのギャップがおもしろい。

太祇が島原に住んだのは、門人の杉吞獅どんし（通称桔梗屋治助）が島原遊廓桔梗屋の主人であった関係。没後編纂された『太祇句選』（明和九年（一七七二年））は、与謝蕪村・三宅嘯山の選。吞獅が刊行したもの。この中に、公私にわたる吞獅の配慮が覗える詞書を添えた句があります。

庚寅冬十月、亦例またれいの一七日禁足きんそくして俳譜はいふ三昧さんまいに入に、草の
屋せばく、浴も心にまかせねば、やうくかゝり湯いと
となむに、時雨さへ降かゝりて、いとゞ寒きを侘わびあし
に、吞獅どんしより居風呂いふうろわかして、男どもにさし荷かせ来し
たり。贈もの、珍おどりらしくうれしと、やがてとび入て、
心ゆく迄よ浴よくしつゝ、かく申侍もうしはべる。

頭巾脱めいでいたゞくやこのぬくい物 太 祇

炭太祇『太祇句選』

（『中興俳諧集』、古典俳文学大系十三卷、集英社）
庚寅かのえとらは、明和七年（一七七〇年）。亡くなる一年前、俳諧三昧とはうらやましい限りです。太祇は明和八年七月三日におこなわれた高徳院での興行に蕪村とともに出座。この出座を最後に、八月九日没。享年六十三。

太祇は蕪村よりも年長ですが、よき俳句仲間・遊び仲間として太祇がなくなるまで交流が続いたようです。

俳句仲間としては、明和三年（一七六六年）に与謝蕪村（一七一六～一七八四）、黒柳召波（一七二七～一七七二）、炭太祇（一七〇九～一七七二）を中心に俳諧結社「三菓社」を結成。三菓社の句会は蕪村の画業のために二年ほど中断しましたが、明和五年（一七六八年）から活動を本格化し、月に二、三回の興行（三菓社中句会）をおこなっています。この句会の連衆には、たいいてい太祇の名前があります。この句会は、蕪村が夜半亭二世を継いだことを期に、明和七年（一七七〇年）に夜半亭社中句会に発展します。明和八年（一七七一年）八月に太祇、同年十二月に召波が相次いで没。このあとも、蕪村は精力的に活動しています（本シリーズ第9回参照）。

遊び仲間としての行状は、なかなか記録に残らないのですが、『蕪村句集』（高井几薫選、天明四年（一七八四年）刊行）冬之部に収録されている句によつて、わずかに想像することができま

す。『蕪村自筆俳句帳』にも載っていますので、そこからの引用。

一条もどり橋のもとに柳風呂といふ娼家有、ある夜、太祇

とともに此樓このろうにのぼりて
羽織はおり着て綱つなもきく夜や河ちどり 蕪村

与謝蕪村『蕪村自筆俳句帳』七四二

尾形仿編著、筑摩書房、一九七四

一条戻り橋で「綱」といえば、渡辺綱のこと。能『羅生門』に出てくる鬼退治の話は、本シリーズ第7回で紹介しました。渡辺綱と鬼は羅生門で戦い、そこで鬼の腕を切りおとすことになつ

ています。『平家物語』の話はこれとは少し違い、渡辺綱が、一条戻り橋で、齡よひ二十あまりの女房に声をかけられ、馬に乗せて送ることになったという話になっています。その女房は、愛宕山に住む鬼の化身で、綱の髻もみぢりをつかんで愛宕山に向かつて飛んでゆきました。綱は少しもあわてず、鬼の腕を源氏の名刀「髭切りの太刀」で切り落としたという筋書。

この蕪村の句は、趣向が入り組んでいて、なかなか理解ができませんが、「古の渡辺綱は鎧よろいに身を固め太刀を佩はいて、夜陰やかげの帰り道に一条戻り橋でうら若き女房に会ったというが、今同じところ、同じく夜に、羽織を着てうら若い遊女に会っている。今川ちどりの鳴く声を聞いているのと同じように、綱が今に生きていれば、きつと鎧よろいを羽織はおりに着がえて川ちどりの声を聞いたであろう。」というような意味でしょう。下世話なことをいえば、若い女房を「いだいて馬に乗のせ、わが身も後輪しづわにむずと乗のり」（平家物語、百二十句本（京都本）、巻第十二）という渡辺綱の行動から想像するに、若い女房というのは鬼が遊女に化けていたのかもしれない。わたしのレベルに引きずりおろすのは悪いけれども、蕪村の想像もきつとそうだったにちがいない。このように下世話に解釈すると、もやもやが急に消えて、蕪村の趣向が腑に落ちますね。

蕪村がいかに太祇を敬愛していたかは、太祇の死後六年後になつた「春風馬堤曲しゅんぷうばていきまぐ」によくあらわれています。その十八首の末尾は、次のような太祇の句の引用で終わっています。

君見ズや古人太祇たいぎが句

戴入たいいりの寝ねるやひとりの親おやの側そば

この句のように、太祇には、人事の機微を歌ったものに佳句があります。平明ですから、少し表現を変えれば、現在に通じます。江戸中期の俳人としては、蕪村が有名ですが、太祇をもっと見直す必要がありますね。

■ 島原住吉神社と幸天満宮

すでに、本シリーズ第17回で、『山城名跡巡行志』第一（一七五四年刊行）記載の「住吉ノ社」（中堂寺通大宮西入）の説明を引用し、その中に、「近來島原町の産沙神うぶすながみとなり、島原遊廓の中に御旅所むたひしよを建てた。」という記述があることを紹介しました。多分、この御旅所が発展したものが、島原住吉神社でしょう。

島居脇の記念碑によると、江戸時代には、南は胴筋どうすじから北は島原遊廓北端までを境内としていたといえます。例祭のときに、太夫・芸妓などの仮装行列「練りもの」が盛大におこなわれました。しかし、明治時代の廃仏毀釈のときに神社株をもたなかったために廃社。明治三六年（一九〇三年）に、稲荷社株の譲渡により、現在の社地に稲荷社として再興。平成十三年（二〇〇一年）に、神社名をもとに復し、島原住吉神社としました。

島原住吉神社の本殿脇には、幸天満宮が鎮座しています。この天満宮も往時には、大宰府天満宮に倣って鸞替うづかかえ神事をおこなうなど、栄えていました。現在は写真の通り、小さな社殿が残るのみです。

住吉の松、天満宮の梅を読み込んだ歌が、島居脇の記念碑に記されています。作者は、富士谷成章（一七三八〜一七七九）。「色



島原住吉神社



島原住吉神社碑

香あらしそふ」としたところが、島原にふさわしい。この歌は、多分「島原八景」のうち「両所の神社りょうしょのじんじや」を歌ったもの。

富士谷成章

住吉の松の常盤に春はなほ

色香あらしそふ神垣の梅

富士谷成章は、国文法の研究に顕著な業績がありますが、のちの回に詳しく触れることにしましょう。

蕪村にも、住吉神社を詠った句があります。住吉神社の神前に額ぬかづく遊女、何を祈っているのか。

住吉の雪にぬかづく遊女哉 蕪村

与謝蕪村『蕪村自筆俳句帳』九七六

尾形仂編著、筑摩書房、一九七四

幸天満宮



■ 島原西門の碑

島原住吉神社の説明板と並んで西側に、島原西門碑があります。島原は、当初は大門だけが出入口でしたが、享保十七年（一七三二年）に、中央の胴筋の西端に西門が設けられ、千本通から出入できるようにになりました。さらに、天保十三年（一八四二年）に現在地に移されました。この西門は、昭和五十二年（一九七七年）まではこの位置に建っていましたが、輪禍によって全壊しました。この記念碑の手前には、往時の西門のレリーフが添えられています。

この記念碑にも、富士谷成章の歌が添えられています。

島原八景の内 西口菜花

成章

花の色はいひこそ知らね咲きみちて

山寺遠く匂ふ春風

富士谷成章（一七三八〜一七七九）の時代の「島原八景」とは、朱雀野の垂柳（大門脇のしだれ柳）、中道の夕照（中堂寺の夕焼け）、野寺の晨鐘（本国寺あるいは東寺の夜明けの鐘）、塵塚



島原西門碑

の桜花（塵塚（二人塚のことか？）の桜）、西口の菜花（西口の菜の花）、楼上の夜月（妓楼からみる夜の月）、衣笠の積雪（衣笠山に積もった雪）、両所の神社（住吉神社と幸天満宮）のこと。

古く（一六八八年頃）、『色道大鏡』巻第十二には、「坤廊八景」（坤廊とは、未申の方向にある遊廊という意味で、島原を漢語風に洒落て言ったもの）として、漢詩（七言絶句）とともに、次の八つが数え上げられています。壬生残花（壬生に散り残った桜）、朱雀孤月（朱雀野の空にもさびしげに輝く月）、古塚草露（古い荒塚（二人塚のことか？）の草におく露）、前塘竹雨（御土居に植えられた竹林に降る雨）、青田暮蛙（青い田で夕暮れに鳴く蛙）、丹徑雪樵（夕焼けの細道を、雪の積もった薪を背負って歩く樵）、東寺雲塔（雲にそびえる東寺の塔）、本国曉鐘（本国寺の夜明けの鐘）。この時代には、西口が開かれていませんので、「西

口菜花」はあげてありません。

■ 大 銀 杏

中央卸売市場の南は、島原の最北端にあたります。ここに、銀杏の大樹が神木として残されています。往時は、このあたりまで島原住吉神社の境内でしたが、一時期廃社になったときに境内からはずれました。神社の復興後（一九〇三）は、境内が狭くなったため、境内に含まれないままになっています。この大銀杏の裏側にまわると、歳白弁財天が祭つてあります。これは昭和五年（一九三〇年）から。



大銀杏

歳白弁財天

記念碑には、服部嵐雪（一六五四〜一七〇七）の句が添えてあります。

嶋原の外も染るや藍島嵐雪

「嶋原の外も」とあるからには、嶋原の内も染まっていることになります。というの考えすぎで、「外面」と解するのが普通



島原西新屋敷 下之町 ②

のようです。

『京都市の地名』には、島原の周囲の八条村、中堂寺村、朱雀村などでは、藍の栽培が盛んだったという記載があります。

この大銀杏の東、集合住宅の二階へ上がる階段の手すりに、町名看板「島原西新屋敷下之町」②が貼つてあります。



プロフィール

藤田眞作（ふじたしんさく）。一九四四年（昭和十九年）北九州市生まれ。学生・大学助手として、十年間、京都で生活。工学博士を取得後、二十五年間、富士写真フイルム（株）足柄研究所にて、記録材料用の有機化合物の開発に従事。次の十年間は、京都工芸繊維大学教授として、有機合成化学・情報材料化学・化学情報学・数理化学の研究教育に従事。そのかたわら和菓子をもとめて京都市内を徘徊し、仁丹の町名看板に興味をもつ。二〇〇七年より、湘南情報数理化学研究所（<http://xyntex.com>）を主宰。

「仁丹の町名看板をよすがに京めぐり」（第18回）2008/09/30
公開版 2010/02/12

© 2007, 2008, 2010 藤田眞作 <http://xyntex.com>

